

# 肢体不自由の疑いのある前言語期の子どもにおける共同注意行動の変化と運動発達との相互関連性

Interconnectedness Between Changes of Joint Attention Behaviors and Physical Development of a Child who was Suspected of Being Physically Handicapped in Prelinguistic Stage

野井 未加 (Mika Noi)

## I. 問題と目的

ジョイント・アテンション(以下、共同注意)とは、広義には複数の生物個体が、同一の対象に対して同時に注意を向けている状態のことを指す(遠藤, 2004)。しかしより狭義の意味においては、個体 A と B がともに対象 O に注意を向けているだけでなく、A と B が相互に、相手が自らと同様に、O に注意を向けていることを何らかの形で「覚知」あるいは「理解」していることが要件となる(Tomasello, 1995)。

村井(1987)は、言語獲得の基礎としての認知発達を考えるうえで、子どもの世界を「ひととの世界」と「ものとの世界」に大きく分けて考え、障害のある子どもの場合、「ひととの世界」が広がること(それは、他者の心的状態に気づき、推測できるようなこと、すなわち「他者認識」の発達につながっていく)に時間を要する子どもが多いと指摘した。また、なかには「ものとの世界」の広がりによって時間を要する子どもがいる。「ひととの世界」と「ものとの世界」とが高次化・統合化されてくるなかで、あるものを別のもので表すといった象徴機能(シンボル機能)や言語獲得が見られてくると述べた(村井, 1987)。

小山(2004)は、行動の理解から意図的な行為者として人が捉えられていく過程で共同注意は洗練されていくが、そこには表象の発達や他者とのその共有が前提になってくると指摘し、これを「表象的共同注意」とした。そして知的障害や自閉症がある子どもでは表象的共同注意が成立してくると、ことばの獲得が近いと予測される事例が多いことを示した。また小山(2004)は、その基礎には、養育者を中心とした「生活を共にする人」との間に「基本的な信頼感」がもてるようになることがある。そのような関係の中で、ショウイング(showing: 物を他者に見せて注意をひく)、ショウイング・オフ(showing off: 身振りゲームなど自ら演じて見せる)、からかい(teasing: からかいへの他者の反応によって他者を理解しようとする)など、他者の注意を取り扱う相互交渉が楽しまれ、表象の発達とも結びついて共同注意が洗練されてくるのではないだろうかと考えたと指摘した。

本稿では、肢体不自由の疑いのある子どもにおいても、小山(2004)が指摘するような他者との「基本的な信頼感」を起点として、他者の注意を取り扱う相互交渉が楽しまれ、表象の発達と結びついていくような発達プロセスが見られるのかについて詳述するこ

と、そして共同注意行動の変化と運動発達との相互関連性について検討することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象児

対象児は、極低出生体重児の親子遊びグループ A の参加者 B(2歳7か月)であった。

B の参加開始時の発達状態として、自力での移動手段はズリ這いに近い状態で、手のひらではなく肘をついて支えていた。下肢の動きとして、脚を交互に動かすことは難しく両脚を同時に腹にひきつけた後に両脚を伸ばして前進していた。胡坐での座位は取りづらく、とんび座りで漸く上体の保持が可能であった。自力での立ち上がりは難しく、両手を持ってあげれば何とか立位は可能だが、膝がガクガクしてしまい、安定性に欠けていた。社会的認知やコミュニケーションの発達については、有意味語は聞かれず、発声行動も見られなかった。また座位姿勢の際視線の方向が曖昧で手もみが続いたため、他者への関心の低さが疑われた。しかし援助者(以下 Th)が B の眼前に座り手もみの様子を模倣すると、一旦手もみを止め、じっと Th の手を見つめ、再度手もみを始めた。さらに Th から発信した行動を模倣するかどうか確かめると、対面した場面であれば Th による“手をたたく(1-3回)”行動をじっと見つめた後、数秒して同じ回数だけ手をたたくななどの模倣をすることは可能であった。

以上のことから、B は姿勢保持と移動能力など粗大運動に遅れがあるものの、他者への関心が低くはなく、対人面での発達が期待された。そこで初期の発達援助の目標として、①対面で B の行動を模倣するなどを通して Th の存在に気づかせ、注意をひきつける、②B の注意が向いたものを用いて遊びを展開する・共に楽しむ、③B が Th の行動に関心を持ち、Th からの提案に応じる・共に楽しむという 3 点を掲げた。

### 2. 親子遊びグループ A

親子遊びグループ A は、1,500 g 未満で生まれた 2 歳の極低出生体重児と保護者を対象とした育児支援の会であり 5 つの目的をもとに実践を行った：①身体や指先を使った遊びを通した子どもの発達の基盤づくり、②同年齢の子どものかかわりを通して、同胞とのかかわり方や社会性を培う、③早産で小さく生まれた子どもをもつ家族が、互いの悩みや心配事を相談しあう場を提供する、④家族が医師や保育士などの専門家に対して気軽に相談できる場を提供する、⑤家でもできる遊びの紹介により、母子の相互作用の活性化をはかる。上記の目的の下、1 年間のプログラムを準備した(計 14 回)(表 1)。時間は 10:00a.m.-12:00p.m.までの 2 時間であった。スタッフは、臨床心理士、保育士・幼稚園教諭、管理栄養士、医師、学生ボランティアであった。1 年間を通して参加した子どもは、B を含め 6 名であった。

表 1 親子遊びグループ A の活動のテーマ

セッション	内容	
	課題遊び	親ミーティング
# 1	新聞紙遊び	自己紹介
# 2	サーキット	出生時を振り返って
# 3	小麦粉粘土	子育てについて
# 4	七夕飾り	医師への質問会
# 5	スタンプ遊び	1学期を振り返って
# 6	夏祭り	夏休みの様子
# 7	シャボン玉	保育士・幼稚園教諭への質問会
# 8	貼り絵	レクリエーション
# 9	運動遊び	VTR 視聴(自由遊びの様子)
# 1 0	葉っぱの造形	他のお母さんに聞いてみたいこと
# 1 1	小麦粉粘土	管理栄養士への質問会
# 1 2	クリスマス会	発達について
# 1 3	音楽遊び	医師への質問会
# 1 4	新聞紙遊び・メダル授与	1年を振り返って

### III. 結果

B の共同注意行動と運動発達の様相から全 14 回のセッションを前期及び後期の 2 期に分けて示す。

#### 1. 前期(#1-#4) : 人への注視や定位、他者の視線追従などを通して、外界の理解を深めた時期

# 1 で入室直後から筆者(以下、Th)が B の様子を観察し、対面で互いに模倣しあつたためか、その後も他のスタッフや参加者と比べて Th を注視することが多かった。B の視線を感じた時にはしっかりと目を合わせ、その後他児や対象を見ると、視線を追従する行動も見られた。こうした視線追従を起点として他児(D,E)をじっと見つめた後、体位を座位から伏臥位へ変換したり(手をついた後に頭をついて脚を伸ばす)、そのまま D,E の方にずり這いで進み、D,E の前で止まったりするといった接近行動も見られた。また、課題遊びのために使用する新聞紙を配る際、身を乗り出して前に行こうとする(# 1)、小麦粉粘土を手に入れるために机を使ってつかまり立ちをする(# 4)など、B の人や物への関心の高さにより立ち上がりや移動などの頻度が増加し、粗大運動の発達も促進される可能性があると考えられた。

## 2. 後期(#5-#14)：自発的提示や手渡し、見立て遊びやふり遊びなどが見られ、外界と自発的にかかわり、表象機能が見られるようになった時期

後期に入ると、不安定ながらも自力で歩行することが増えてきた。学生スタッフがシール帳を Bに見せたところ、そのシール帳を Thに見せに来るといった自発的提示や手渡しといった行動も見られた(#6)。またお名前呼びの際、初めは Thの方を向いていたにもかかわらず、名前を呼ばれるとわざと顔を背けて他の方を向くなどのからかい行動も見られた。さらに#14では、Thが玩具の聴診器をもって「お腹を見せて」と問いかけると、Bが自分で服を上げてお腹を触りながら大人に見せるといったふり遊びや、おままごとをしていて積み木を食べるふりをするなどの見立て遊びをするようになった。反対に、視線追従などの行動は減少した。

## IV. 考察

来談当初、Bの自力での主な移動手段はずり這いであり、両脚を交互に動かすことが難しかった。両手をもっていれば歩行は可能であったが、膝がガクガクしており非常に不安定な状態であり、運動発達において著しい遅れが見られた。また胡坐をかくことはせずとんび座りになることが多く、股関節を開くことや伸ばすことの困難さ、骨盤の後傾などが見られた。

一方で対人面においては、ThがBの真似をすると、自分がしていた動作を止めThの仕草をじっと見つめた後、元の動作を行ってThの真似を促すといった行動が複数回見られた。Thの行動の模倣も見られ、10分程度のやり取りの後にはThへの注視が増加したことから他者への関心が高いことが推察された。以上のことから、他者を起点としてBの外界への関わりを促していくことを援助の目的とした。

親子遊びグループAは、その目的性やプログラムの内容から、Bの運動発達の遅れに対して直接的に援助を行う場としては適していないと考えられたため、運動発達の促進をBへの援助の目的に掲げることはしなかった。しかし元来Bには他者への関心の高さがあったと考えられ、注意と興味関心を共有することを目的としたかかわりを行ったことで、Bは他者を注視し、他者の視線を追従するといった行動を頻繁に行っていた。他者や対象と関わることへの興味が高まり、「他者と同じものが欲しい」「他者と同じことがしたい」といった意思が生まれ、結果として自発的な接近行動、立ち上がりなどの頻度が増加した：つまりBの中で「立ちたい」という意図が芽生え、「立つ」「歩く」ことの目的ができたことで、これらの頻度が増加し、結果として独り歩きが可能になったと言えるのではないだろうか。

他方、独り歩きが可能になったことで、自発的提示や手渡しなどを行う様になり、自らの興味関心を他者に伝える手段が増えてきた。それに伴い、遊びの幅が広がり、他者からかう行動や見立て遊び、ふり遊びが出現し、表象機能の発達が促進されていった：つ

まり B は移動がしやすくなったことで、他者とのかかわりが増え、他者と注意や情緒を共有する共同注意行動が出現しやすい土壌ができたのではないだろうか。

本事例は、肢体不自由やその疑いのある乳幼児において、「立つ」「歩く」という目的が子どものなかに芽生えることの重要性和、その目的を見出すための土壌としての他者の存在の意味について、重要な示唆を与えてくれたと思われる。

## 引用文献

- 遠藤利彦 III-23 ジョイント・アテンション. In: 発達心理学 [改訂版]. 子安増生・二宮克美編. 新曜社. 1992.
- 小山正 障害のある子どもの共同注意の発達とその支援. In: 共同注意の発達と臨床 人間化の原点の究明. 大藪泰・田中みどり・伊藤英夫編著. 川島書店. 2004.
- 村井潤一 言語と言語障害を考える. ミネルヴァ書房. 1987.
- Tomasello, M. Joint attention as social cognition. In: Moore, C. & Dunham, P. (Eds), Joint attention: Its origins and role in development. Hillsdale, NJ: Erlbaum, 103-130. 1995.